

日本国内でも活躍する修了生・在学生



藤岡 篤司 [修了生]

一般社団法人 豊かな暮らしラボトリー

フィリピン・ミンダナオ島の農村部にある現地 NGO 児童養護施設の運営に携わっていたとき、身体的な障害だけでなく、家庭や宗教などを背景に様々な障害を抱えた児童が学校に通うことができている現状を知ったことから、現地に特別支援学級を立ち上げました。そこで、実践だけではなくアカデミックなアプローチも必要だと感じ、本学の修士課程に進学。多様な視点、バックグラウンドを持っている履修生や、世界中に研究フィールドを持っている先生方と出会い、社会課題解決に向けた議論・研究を進めることができました。現在は、NPO での国際的な学習支援プログラム、行政からの委託のまちづくりに関する取り組み、大学の非常勤講師など、国際・教育・福祉などをキーワードに活動しており、本研究科での学びや経験が活かされていると感じています。

曾田 夏記 [修了生]

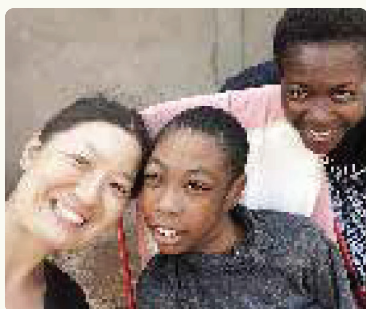
自立生活センター STEP えどがわ 職員

障害者インターナショナル (DPI) 日本会議 特別常任委員

現在、DPI 日本会議の役員として、障害当事者の立場から国内の障害関連法制への政策提言をしたり、江戸川区にある自立生活センターの職員として、地域に暮らすひとりひとりの障害者に寄り添い相談にのったりしています。以前、JICA 職員をしていた際に本研究科に在学し、フィリピン農村部に暮らす障害者の生計機会について、選択を制限する要素は何かを現地で 1 年かけ調査しました。フィールドは江戸川区になりましたが、活動地域の全体像を把握すること、インタビュー時の所作、「障害者」に関する問題の相対化など、修士課程で身に着けた「レンズ」を通し、今「コミュニティ活動」ができていると感じます。仕事と学業の両立は大変でしたが、心から「やってよかった」と思える修士課程でした。



池田 麻衣 [修了生・国際社会開発専攻 博士課程 3 年]



日本で理学療法士として障害児に関わる中で、制度とニーズのギャップに疑問をもち、制度が整備されていない途上国の状況を知りたいと思い青年海外協力隊に参加しました。経験を言葉にして落とし込みたいという思いで進学しました。修士課程では、障害児の学校教育へのアクセシビリティを切り口に、障害とは何かを深め、障害児・者を包摂した社会の構築に関して考えました。様々な分野で活躍する院生さんや先生方との議論で、これまでとは異なる視点での「モノの見かた」を学びました。帰国後も障害分野に関わりたいと考え、特にお子さんの成長・発達のお手伝いをしています。お子さんの成長・発達を考えるうえでは身体機能に限らず、家庭状況、母子関係、社会資源など様々な課題が多様な形で存在します。何がその子の発達に影響を与えるかを様々な視点から考えることが求められます。修士課程での学びが今に活かされていると感じています。